

任意団体 福島のこれからの 10年、20年、30年後に向けた動きを。

3.11あの時
P74 Report. 35の続きです

いわき市

吉田 恵美子 いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンター

取材日 2012.06.26

いわき市社会福祉協議会、特定非営利活動法人ザ・ピープル、いわき地域活性プロジェクト MUSUBUが参加団体となり、小名浜地区内の災害被災者に対する生活復興支援を行なっている。小名浜のショッピングモール「リスポ」に「小名浜地区交流サロン」を開設し、イベントや各種教室、民生委員の方によるよろず相談なども開催している。

お母さんたちの雇用創出 プロジェクトのその後

「母さんのお弁当」プロジェクトは、2011年6月から3月末までザ・ピープルが助成金を利用して運営し、2012年4月以降の自立を目指していた。しかし、自営での継続は難しかった。昨年6月時点では、私たちが認識する地域の最重要課題として、津波被災者の雇用問題を掲げていた。だが、現在ではその認識を改めている。いわきが抱えている地域の課題は、被災者のための雇用の不足だけではない。28,000人が双葉郡からいわきに避難していることで、コミュニティ内には様々な問題が生まれつつある。また、一次産業は大きな打撃を受けているし、外からどう人を呼び込むかという点も悩ましい問題だ。

自分たちが関わっていかねばならない課題は、あの時点(2011年6月)から比べて明確になった。そしておさえるべきポイントが最初の頃とは違ってきていることも分かった。お弁当屋さん維持のために自分たちの体力を注入するのではなく、本来私たちがやらなければならない事業にシフトしていくことを決め、助成期間が終わった時点でこのプロジェクトを終了することにした。

ボランティアセンターの課題

課題として取り組んでいるのが「コミュニティ」の部分だ。小名浜のショッピングモール「リスポ」の一角に「小名浜地区交流サロン」を開設した。誰でも、どんな人でも来てOK。本を読んだり、お子さんを遊ばせたり、手芸教室に参加したり、お茶を飲んだり、誰でもが買い物ついでに気軽に集まれる、そんな場所を目指している。気軽に集まって一息つける機会が、誰にでもオープンに設けられていることが大事だと考えている。いわき市内の現状として、仮設住宅より借り上げ住宅に入居されている被災者・避難者の方が多いので、こうした方たちの行く場所、集まれる場所としてこのサロンの設置・運営を行なっている。



また、地区の社会福祉協議会、包括支援センターと協力し合いながら、毎月小名浜地区で1回、泉地区で1回、いわき市民の被災者、特に見なし仮設入居者に対してサロンを開いている。ちょっとした音楽や、マッサージなどを楽しみながらコミュニケーションの場づくりを行なっている。更に、県保健福祉部相双地区担当いわき駐在の保健師さんたちが、双葉8町村からの避難者にとって交流の場を設けることが難しいという悩みを持っていることが分かったので、今後は町ごとに呼びかけて、「小名浜地区交流サロン」を使って町の交流会の日を設けようと話が進んでいる。

いわきではいまだに仮設住宅が建設中だ。加須市に避難している双葉町民の50%が仮の町をいわきに持ちたいと思っているとの調査結果が発表されていたが、会津や県外に避難した人たちもいわきに戻りたい、いわきまでは行きたいという思いがあると聞いている。受け入れのための住宅は足りず、用地さえあれば仮設住宅をもっと建設したい意向を持っているという。迎え入れている側としては、去年の事故直後の時期とは違った受け止め方を示す人も現われてきている。そこに難しさがあると思う。今回の震災以降の経過の中で、色々な立場の違い、思いの違いがコミュニティの中に表面化してきている。支援の立場にいる私たちも、相手によって顔を伺い、相手の立場によって話す内容が違って来ざるを得ない。これが現実だ。

サロンを運営しているスタッフは若い人たちが中心のため、基本的に重い悩み相談は受けず、民生委員の方に入っていただき対応してもらっている。NPOが単独でできることには限界があるが、様々な主体と連携することによって、できることは大きく広がっていくと考えている。NPOとしての独自性に固執することより、困っている人達にとって「助けて下さい」と言いやすかったり、私たちが他のもっと力になる人たちと手をつなぎやすかったり、そういう立ち位置でありたいと願っている。

いわきオーガニックコットンプロジェクトのその後

15箇所、15反ぐらいのところで栽培しているのだが、なかなか生育が進まず雑草との戦いに明け暮れている。コットンプロジェクトは一次産業の再生も念頭にあるのだが、有機農法でのコットン栽培は雑草を抜くのも収穫もすべて手作業のため、たくさんの人手が必要となる。その部分に孤独感を深めている避難者の方、地域の方、首都圏からのボランティア、いろいろな立場の方たちが手を差し伸べることによって交流が生まれて、コミュニティの再生につながっていくような、農業だけではなく人々の心にも何か動きを生み出すようなプロジェクトにしたいと思っている。

ボランティアは首都圏から毎週50人くらい来ている。栽培地によっては仮設の方や地域の方々にも参加いただいている。今年は試験栽培の年。まずは順調に生育してくれることを願っている。収穫の時期は11月。最初に収穫した綿花からは、いわきのオーガニックコットン100%で何かシンボリックなものを作りたいと計画 중이다。

農家の方たちは、自分たちは酷いダメージを与えられた上に孤立無援だと感じている。コットンプロジェクトは、その思いが少しでも和らげばいいという思いで始めた。巨万の富が築けるとも思っていないし、いわきオリジナルのオーガニックコットンブランドを立ち上げると明言しているが、ビジネスとして成立するかなどまだ見通しが立っていない。でも、今まで農業に関係のなかった本会のような団体でも、こういう取り組みがあるから一緒にやりましょうと提案して動き出すことが農家の方の目に留まり、孤立しているわけではないのだと感じてもらえたら、それだけでもいいと思っている。

市内の中山間地にある遠野町には、首都圏からの援農ボランティアが度々訪れている。農作業のお礼にと、農家の方が毎回毎回震災後の体験を語り、地域の方々がお昼ご飯を作ってごちそうする。それを楽しみにまた首都圏からボランティアに来て

くれるリピーターも多い。こうした形を市内各所で作り出せたらと思う。

これから

福島の「今後」はここ3年の話ではなく、10年、20年、30年先のことを指す。単独のNPOで被災者に向き合う事業を継続していくには限界があると思う。つい先日、いわき市内で被災者支援に関わっているNPOや社協、いろいろな主体が集まって「3.11被災者を支えるいわき連絡協議会」を立ち上げた。大きな組織を作って被災者と長期的に向き合う仕組みをきちんと作っていくことが、いわきの今後を考える時に必要だろうと思っている。これから長期戦をするためにはきちんとした核が必要だ。いわきでのこの体験を外から人を招いて学んでもらう、スタディツアーの受け入れを有料でできるような形も考えていきたいと思っている。

直近の「これから」で言えば、私たちの将来は水俣にひとつの答えがあると思っている、水俣に学ばせていただいている。コミュニティの中にチソの関係者、患者、行政、いろいろな立場の人がいた。あの町の中で何もしゃべれない時間が40年あった。これではだめだともやい直しが始まって、今では環境に特化した町として再興を果たしている。あの流れを理想とし、私たちはもっと時間を短縮して追いかけていきたい。

この夏には福島のことを思って水俣から発したメッセージを集めた展示会や、水俣病の資料館で語り部をされている当事者の方に来ていただき「語る」ということを伝えてもらう企画を行ないながら、10年、20年、30年後に向けた動きを作っている。その世代を担う人を育てなければならない。熊本のNPOと連携して夏休みに中高生をいわきから水俣へ派遣し、水俣の事を学び保養もして帰ってきてもらう企画も進めている。



撮影：2012.11.4 いわき市遠野町為朝集落オーガニックコットン栽培地収穫祭の様子